

## 私の保育

——子どもたちと私——

入園式。こども達と私の出会いの日。こども達の目は不安と期待であふれんばかり。私も不安と期待がいっぱい。あれからもう三か月たちました。もうすぐ一学期も終りになります。私は入園当初の頃が好きです。一人一人のこどもが、それぞれに必死の思いで頑張っているのがよくわかります。

部屋の隅に立ってじーっとみんなを見つめる子。じっと立ったまま動かない子。私の手をぎゅーっと握りしめてはなさない子。「先生と同じことするの」と言っていて、後をついてまわる子。私にピタリ寄りかかっている私が動くと思われてしまった子。ひたすら私をたよって園生活をしているのが伝わってきます。朝、登園してから帰るまで「先生おうちに帰りたいの」ばかり何十回と言ってくる子。がまんしているんです。かと思うと、反対に先生なんて関係ないよ、と

いう顔をして幼稚園中を走り回っている子。

みんなそれぞれに自分のできる範囲で精一杯がんばっています。そして私も必死。名前と顔を一致させ、「せんせい」と呼ばれると「ハイ」とか「なあに」「どうしたの」と答え、時には「おかあさん」と呼ばれたりして、一人で十人分位しゃべり、手も十本あっても足りないほどの忙しさ。でも、一人一人のこどもを、白紙の無の状態から見つめることができるので、受ける印象はとても新鮮です。一人一人のこどもがどんな気持ちでいるのかつかもうと一生懸命。

こども達も少し慣れてくると、今度は、入園前の生活がにじみ出てくるような思い思いの動きがふえてきます。おもちゃが欲しいとなったら欲しい。やりたいとなったらやりたい。いろいろ自分の気持ちに正直に行動するようになってきま

す。幼稚園では、自分の気持を素直に出して遊ぶことは、やりたいほうだいにさせるといふ意味ではなく、必要なことであつて、そのことが基本になつて、その上に集団生活のルールも身につけていくように思います。入園当初の頃のことでも達と私の新鮮な関係、これをいつまでも持ち続けなければと思つています。

今年もいろいろな事がありました。

M君。一人っ子。とても自分の気持に正直に行動します。

そのかわりトラブルもよくおきます。おもちゃの取り合ひは毎日のこと。

「どうしてブロック取っちゃつたの？」と聞くと、

「だつてぼく使いたんだもの」本人にはそれ以外の理由はないんです。

「でも〇〇君だつて使いたいのよ。人が使っているもの黙つて取っちゃつていいかな」なんて言つてみても駄目です。

「だつて使いたんだもの」

しばらくこういうやりとりがありました。友達と遊ぶ時のルールが少しずつ自分のものになつてきているようです。

このM君、とても正直で根は真面目です。私の言うことも

そのまま受け入れます。先日、こんなことがありました。お弁当の時です。ああでもないこうでもないといろいろ文句を言つて、なかなかお弁当を食べようとしないで、とうとう

「ぼく、おうちに帰つてお弁当たべろ」と言い出しました。その時、別のこともが、お弁当を残したいと言つるので、「もう少し食べないと遊ぶ元気なくなるからあとちょっと食べようね」と話していると、M君が突然大声で泣き出したのです。何ごとかと聞くと、

「ね、先生、ぼく元気ある？ 元気ない？」と、泣きながら真面目に聞くのです。そしてお弁当は全部食べました。

M君の心の中は、真白で、新しい経験を、そのまま吸収しようとしているのでしょうか。私の言葉、行動がM君の心の中に刻まれて行くのかと思うと、本当に緊張し、毎日の生活の中のちょっととした言葉かけ、ちょっととした出来事がこどもにとつては、とても意味のある事なのだ、あらためて感じます。あたりまえのことですが、このあたりまえのことの毎日毎日のくり返しが大切なことなのでしょう。M君のこの素直さ、物事の受けとめ方、こどもと接する時に私も少し見習つていつも新しい気持で受け入れるようにしなくては。

K君、クラスで一番体が大きくて、動きもすばやく、手も早い。好奇心のかたまりのようでもありません。ある場所から他の場所へ移動する時、まっすぐサツとは行かない。途中で何かしらして行くのです。腕を振りまわしながら歩いて誰かをぶつことになってしまったり、誰かが何かしているのをちよつとのぞいてみたり、触ってみたり、取ってみたり、何かします。そのたびに、「先生、あのね、K君がね」の音が聞こえるか、泣き声が聞こえてきます。私も「またか」と、うんざりすることもあります。本人も悪気でもやっているのではなくて、ついやりすぎたり、力を入れすぎたりしてしまうのです。私の顔を見て、「先生、またやっちゃったよ」とでも言いそうなすまなそうな顔をするのです。

トラブル製造元のK君、でも正義感には燃えています。この頃では、泣き声が聞こえると飛んで行って、

「どうした、だれがやったんだ」と聞いて、

「おまえ、ちゃんとごめんねしろ！」と言ったり、

「二人とも悪いな、おまえら両方ともあやまれ！」と、かっこいいこと言ったりします。時には、「先生、おれ、あいつのかわりに、仕返ししてやったよ」なんてニンマリすることもあります。このK君の行動力、一時もボンヤリとせず

いつも目をキラキラさせて動き回っている姿を見ていると、遊びの中のルールをどう教えていったらいいのか悩んでしまいます。でも、今はトラブル製造元にはなっているけれども、きつとたくましい素敵な人になるような気がします。

M君とK君、実はクラスの中では犬猿の仲。二人よると必ずけんかになります。よほど相性が悪いのか。

「ぼくの顔を見た」とか、「さわった」とか、ちよつとしたことが原因ですぐにけんかになります。それほど相性の悪い二人、大人だったらお互いに避けて近づかないでしょうけど、どういうわけか、近くにいます。しょっちゅうゴタゴタが起きるといふこともそれだけ身近なところにいるからでしょう。

あつまりの時も並んでいたたり、私が意識的に二人を離れた所に座らせても、いつのまにやら二人くっついて何かやっています。不思議な二人です。けんか友達と言うのでしょつか、きらいだ、いやだと言いながらも、きつと何か引き合ふものがあるのでしょう。これからどういう関係になるのか楽しみです。案外信頼し合える良い友達になるかも知れません。そうなつて欲しいと思っています。

私の保育と題して書きはじめたのに、とりとめのないことをダラダラ書いてしまいました。私の保育って何だろうと、ここであらためて考えてみると、何だか一番大切なことを忘れてしまっていたようなはずかしい、恐しい気持になってしまいます。

私の保育といっても、それは私一人ががんばってみてもどうしようもないことで、こども達と一緒に生活してはじめてできること、そしてこども達と一緒に創って行くことのように思います。つい私の方からこども達にこうしよう、ああしようと言いついたり、口うるさく注意ばかりして、ダメな事ばかり目についてイライラしてしまうことがよくあります。

こども達が帰ったあとの静かな保育室に入ると「あーあ、またやっちゃった」「あの子にあんなこと言っちゃって悪かった。どんな気持で帰ったのかしら」とか「どうして私は一言多いのかしら」と、反省ばかり浮かんできます。いくら反省しても遅いので、こども達にとってはかけがえのない一日、一つの経験として、心に刻んでしまったのです。

私自身にもっとゆとりを持って、こども達の話していること、していることに耳を傾け、目を向けなければと今さらながらに思います。言いつくされたあたりまえのことですが、

気持の余裕がなくて私一人であくせくしているこの頃、ここでまた原点にもどって、一日一日のこども達一人一人の小さな出来事を新しい気持で受けとめることが今の私に必要なようです。

最後にとても心に残っていることを書きたいと思います。

去年の秋、十月の運動会の一週間位前のことでした。運動会にはクラス全員が参加するリレーをすることになっていました。クラスを男チーム女チームと分けて、二クラスで四チームで競争することになりました。私のクラスもとても張り切っていました。

ある日、屋上でリレーの練習を終って部屋にもどってみると、男児が数名かたままって何やらガヤガヤしています。見るとA君を真ん中にしてみんなを取り囲み、A君の両足を曲げたり伸ばしたりしているのです。A君は困った顔をして黙ってはいましたが、目は少し赤くなっていました。何ごとかと思ひ、

「どうしたの?」と尋ねると、M夫が、「A君の足を鍛えてるの」と答えるのです。

「どうして?」と私。「だってA君走るの遅いんだもの。こ

れじゃすみれぐみの男チームはリレー負けちゃうよ。だから運動会まで足を鍛えるんだよ」と言うのです。驚きました。

確かにA君は、走るのが遅いのです。生まれ月が遅いこともあるのですが、運動全般が苦手で、走るかっこも少し幼なく足を少し横に開き加減に走るのでした。その走り方は一人目立っていました。年長ともなるとそういうことを見てわかるのですね。

「そう、わかったわ。でも、見て。A君うれしそうかな」と私。

「うれしそうじゃない」と周囲の男児が口々に言って、

「ねえ、A君、うれしい？」と誰かが聞くと、A君は首を横に振りました。

「そうね。うれしくないみたいね。でもみんなはA君に足を鍛えてもらいたいなの？」

「うん、だって鍛えると走るの速くなるよ」

「それじゃほかにいい方法ないかしら」と私が聞くと、M夫が、

「そうだ、野球の選手みたいにマラソンしようよ。ねえA君、マラソンならいい？」

と聞くと、A君は、

「うん、いいよ」と答えてくれました。この頃、王選手の影響で野球の選手というだけであこがれの的でした。こうして翌日から毎朝、男児はA君の足を鍛えるため、朝のマラソンをすることになったのです。朝、男児が集まると、「先生、マラソンやろう」と私にも声がかかります。こども達と一緒に走りました。A君も、ニコニコしてやっていました。リレー的なのM夫は、

「次はうさぎとび。野球の選手はこれで足を強くするんだよ」とか、「次はのぼり棒。これは手も強くなるんだよ」と言いながら、鉄棒、ジャンブルジムなどいろいろやりました。そのうちにA君も自分から、「マラソンやろう」と言うようになりました。

こうして運動会当日のリレー。A君への声援はひとときわ大きく聞こえました。

「先生、A君、本当に走るの速くなったよ」

「すごい、A君速いよ」

「マラソンやってよかったね。先生」

男児が口々に言っていました。私の目にも、まえよりもずっと速く、かっこよく走っているように見えました。

(東京都・港区立三光幼稚園)